

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 7 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24730452

研究課題名(和文)心理主義化と参加型社会の形成

研究課題名(英文)Mobilized Society through Psychologized Knowledge

研究代表者

崎山 治男(Sakiyama, Haruo)

立命館大学・産業社会学部・准教授

研究者番号：20361553

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、現代の新自由主義化とグローバル化が労働場面や私的場面での関係性を変容させる力学に関して、心理主義化に注目した理論的かつ実証的な研究を行った。

具体的には、労働の感情労働化が進む中で公私における感情マネジメント能力を得ることへと人々が煽られる中で、「生の感情労働化」と社会への包摂-排除が進むことを、感情社会学と現代社会学、社会哲学における統治論・権力論とを接合させる中で示した。

それを裏付けるために、1990年代から現代に至るジェンダー、階層を異にする雑誌や自己啓発書におけるビジネススキル書、恋愛作法書などを分析し、「生の感情労働化」が階層差をも生み出すメカニズムを示した。

研究成果の概要(英文)：The aims of these studies are to conceptualized the contemporary society as a psychologized-mobilized society through psychological knowledge. Today, many people tend to take part in the emotional labour. Also, they want and try to fluent relationships by using several psychological knowledges.

Then, our lives become to the "emotional labour" in contemporal society. Many people judged and ruled by the scale what degree they are good at doing emotional labour, not only the workplace but also private lives.

研究分野：社会学

キーワード：心理主義化 感情労働 セラピー文化 権力と統治

1. 研究開始当初の背景

本研究は、2000年代になり日本社会でも顕著に現れてきた、教育・労働場面での自己実現への煽りと、それを支える心理主義的な知のあり方を分析することを当初目指した。

現代社会の特徴として、心理主義化の進展がある。それは、ライフ・コース上の様々な生きがたさを心理学的な知によって解消しようとする心性の広まりを意味する。

こうした心理主義の広まりは、一方ではそれによって生きがたさを解消することが出来ることから、社会的に「善」なるものとして認識されてきた。それは、例えば様々な災害・事故に対する「心のケア」の重視といった事柄に端的に見られる。

またさらには感情労働の進展という事態もある。サービス産業化の進展という趨勢の中で、商品を販売したり労働場面をマネジメントしたりするために心理学的な知がますます求められる社会となっている。

しかし、こうした心理主義の広まりは、果たして無条件に「善」なるものと言えるのだろうか？そこには、心理学的な知の生産と流通という権力の問題がある。これまでの構成主義的な研究が明らかにしてきたように、心理学的な知の普及は平行して様々な逸脱現象を精神的な「病理」としてきており、「心」の表し方・抱き方を正常/異常と区分していくことによる「心」を通した統制過程でもある。

その上で、2000年代になりグローバル化やIT化、雇用機会の自由化が進む中で、正規雇用ホワイトカラーの職種がすり減る日本の社会構造がある。その中で、ホワイトカラー職種、とりわけ企業職種内での企画立案、対人関係のマネジメントを担う職種がいわば希少財となっている。そのため、そうした職種に就業することが自己実現として称揚され、そのために心理学的な知が求められる状況がある。

さらに構図は労働場面のみならず、交友・恋愛関係といった私的関係にまで広がる。本来、経済資本・社会資本に強く規定されている筈のこれらの関係性が希少財ともなり、かつ個々人が求めなければ獲得されないことが喧伝される中で、心理学的な知の普及の下地がある。

本研究は、こうした2000年代における新自由主義化、グローバル化、ICT化といった日本社会の構造転換を受けた、心理主義の進展という現代社会の構造転換を背景としている。その上で感情をマネジメントする手法に関する知を通した社会統制と権力という課題に取り組んだものである。

2. 研究の目的

上記の背景の下、本研究では、現代の新自由主義化とグローバル化が労働場面や私的場面での関係性を変容させる力学に関する理論的研究を、まずその主たる目的とした。

またそれを受けて、具体的に労働への参入、労働場面やそこからの撤退、恋愛・結婚等の私的場面における関係性における心理主義的な知の具体的な浸透と普及の現状を探ることを目的とした。

具体的には、本研究では、まず1980年代から現代にいたる主としてビジネス誌を中心とした雑誌媒体を取り上げ、現代日本社会における心理学的な知が生産・普及する過程を精査することを目指した。その中では、これまで仮説的に得られてきた成果である「心」の正しさの指標として、人間関係での距離感・マナー・雰囲気を読むことの高度化と複雑化を明らかにすることを狙った。

その上で、このプロセスを経て後の2000年代に、心理学的な知が「人間力」として「成功」の用具とみなされる地点に至る知のありようと、それが「望ましい」とした自己と社会の像がなんであったのかを言説分析を通して明らかにすることを目指した。

第二には、これに呼応した形で、心理学的な知の特異性といった側面に注目した権力論の精緻化を目指した。現代社会においては、「人間力」・「コミュニケーション力」・「KY」といったコトバが教育・就職・私生活の中でもはやされている。このことが示しているのは、心理主義は、抑圧・疎外、あるいは知の生産とそれによる統制という次元でのみ把握することはできないという点である。

むしろ、人々は感情労働・私生活の中で、むしろ自らの感情マネジメント能力を高め、その心理学的な力を高めることを欲しているものであり、そのために多様な社会参加へ投企することを余儀なくされている。

そのため、「人間力」・「コミュニケーション力」というコトバが社会に流通すればするほど、それを保持していることを証明するための社会的なつながりを保持しようとする参加型動員社会が強化されていく。そして、その反転として社会からの「自発的」な撤退を行うよう迫られていき、それが「ニート」、「引きこもり」といった形で現象する力学の分析がある。

これらの知の配置と前述した2000年代の社会構造の変化により、対人関係能力の有無による階層化・参加型社会の形成が形成される。そしてそれが、「人間力」というコトバに見られるように、社会への参加を煽りが心理主義化として見られたことを、A.ネグリ、N.ローズらの権力論、統治論の見地を援用しつつ感情社会学理論・権力論として精緻化することを目指した。

その中で、就職、労働、恋愛、友人関係の形成にむけ1990年代から影響力のあった心理学書、自己啓発書、雑誌などの言説分析を行う。また他方、このプロセスで、社会への参加が困難なことが「心」の問題とされてしまったことを質的調査から明らかにする。

心理学的な知は、一方では社会からの撤退を生み出した指標として、他方では社会参画

への「成功」の地位指標として、参加型社会の形成へのプッシュ要因・プル要因となる。そのありさまを雑誌等の言説分析と、社会から「撤退」を余儀なくされている引きこもり層への質的調査から明らかにする。とりわけ「人間力」およびその周辺概念が(元)引きこもり層にどのような意味を持つものとして解釈されたのかを質的調査から明らかにし、心理主義が排他的な効果を持つか否かの分水嶺を突き止めることを目指す。

これらを通して心理主義化を社会への「参加」の要請という現代社会の統制としてとらえ直すと共に、それを打破しうる可能性を示すことを狙った。

3. 研究の方法

まず理論的な研究方法から記す。心理主義化に関する研究は社会学でも現代社会論、社会意識論の中でようやく取り組まれ始めたものである。その中で本研究は行ってきた方法と意義を示そう。

まず、第一には心理主義化の現状を網羅的にマッピングすることを目指した。現代社会における心理学的な知の生産・流通のあり方を、1980年代にさかのぼった専門書からビジネス誌、女性誌を主とした一般雑誌等の中から示すことを行った。

また、その中でとりわけ「心」が特に注目されてきた地点と、そこでの心理学的な知の用いられ方を明らかにする。その上で、それが「人間力」と語られ参加型社会と結びついた論理を示すことを試みた。

これは、未だなされていない現代の心理主義化の分析を全面的に展開し、心理主義的な知と参加型社会の形成という現代社会を構成する権力・知の審級を明らかにすることを目指したものである。

第二には、この点を踏まえた「人間力」と引きこもりとが結びついてしまっている現状を明らかにすることを目指した。

具体的には、引きこもりの人々が社会からの撤退させられるありさまを、前述した雑誌などでの「心」の正しさや「人間力」の強調の時期や論理を関連してさせつつ、実証的に分析・記述することを目指した。それによって「人間力」・「コミュニケーション力」が、実は現代社会における包摂と排除の審級となりえてしまうことを明らかにする。

この二つの点を通して、最終的に現代社会で進行しつつある心理主義化の実態と、それが社会への「参加」と「退場」を示していくありさまを明らかにする。

それは、前述した現代社会における参加と排除をもたらす力学を心理主義化という地点から示すものである。

このプロセスを通して、本研究では理論研究としては感情社会学における心理主義化論、感情労働と動員・疎外論、社会学・社会哲学における現代社会の統治性並びにそれに伴う排除と包摂に関わる権力論の接合を

行った。

心理主義化と社会意識の変容に関しては、確かに感情社会学や社会意識論で検討されている。しかしそれは心理主義化を促していくセラピー等の技法の高度化や、対人サービス業での感情労働を行う技能の高度化と「やりがい」といった個別事象を扱うものであった。

それに対して本研究は、グローバル化と産業構造の変容、参加と排除に関する力学の変容といったよりマクロな視点にたった社会理論との統合を試みた点に新たな独自性がある。

続いて、言説分析と質的調査について記す。1980年代の自己啓発ブーム以降、2000年代に至るまでの自己啓発・セラピーに関わる資料の言説分析を行う。その具体的な内容は、特に社会的影響が多かった本(『EQ:心の知能指数』など)と、ジェンダー毎に異なるビジネス誌(「プレジデント」・「日経ウーマン」など)と、階層毎に読み手が異なるとされる雑誌(「SPA!」や一般女性誌など)の分析である。

その際に重要的に分析されたのが、心理主義的な知が求められる場面や特性の変化、社会への「参加」の煽りと「撤退」へのスティグマといった側面である。

まず、心について述べよう。現代社会の心理主義化を進展と捉えたとしても、必ずしも社会のすべての範囲に心理学的な知の導入がなされたわけではなかった。むしろ、社会への「参加」の感覚を得るような就職・友人関係・恋愛関係といった特定の事柄に関して心理主義的な知の普及が進んでいったのである。

ここから、友人関係・ビジネス関係・恋愛関係など特定の事柄に対して、心理主義的な知に即した形で対人関係を形成する視点が形成し、階層の高低とジェンダーに即して次第に普及したことを分析した。

続いて、心について述べよう。心理学的な知の普及と、それによって人間関係を良好なものに保っていくことは、2000年代に入り単なる「心構え論」ではなくなる。TPOに応じて事細く、「人間力」として対人関係で持つべき「心」が指示され、それがビジネスから恋愛にまで波及していた。このように、以前は心構えかつ道徳的な言説として機能していた心理学的な知が、2000年代に入りビジネス・恋愛・交友など、急速に具体化・用具化し、自己が保持すべきものとなったことを分析した。

それらを踏まえて、「人間力」・「コミュニケーション力」といった点に注目して、対人援助の変化を分析することを目指した。具体的には、引きこもりを支援する対人援助職10数名程度に対するプレ調査を試みた。その際には、「人間力」と社会への参加と撤退の基準、「人間力」と対人援助の変化、を重点的に検討した。

4. 研究成果

まず理論的な成果から記す。心理主義化の進展の中で、感情労働は、必ずしも疎外としてだけでなく時には「人相手の仕事」が労働の報酬としても機能するという感情労働の二面性がある。また同時に、感情労働での企画・対人マネジメント能力がいわばより高次の能力として、個々人の生の中で課せられ、それを保持していることが労働場面のみならず、私的な生活場面での優劣を決める審級となっていることが示された。

このような形で、現代社会は人々を「生の感情労働化」(A.ネグリ)へと自発的に駆り立て、そこで達成感を得られるように人々を動員する。そしてそれが、個々人の能力や心理に起因するものと見なすことによって、達成不可能な者を排除する。

これらのことが、社会構造上の優位・劣位と連動して生じる。つまり、感情マネジメント能力は、本来的には社会構造上の経済資本・文化資本といった社会関係に沿って重層的に蓄積され、規定されてもいる。

しかし、それが、「心」にまつわる指標であるが故にそうした文脈をそぎ落とされた上で個人化される。そのため、個々人はそれを獲得しないしはより高度な次元で達成することへとあらゆる場面で煽られ、それが出来ない場合には個々人の能力、努力、性格等々の個人的な問題へと回収されてしまう。

このように、心理主義化を促す知は、階層の上下、ジェンダーとほぼ平行した形で雑誌媒体に現れる。そしてその不平等さは、個々人の意識、心構え、技法として現れる限りにおいて、表面化することはない。

それゆえに元々、社会構造上の立場性から感情労働の遂行において劣位な立場にある者、あるいは心理主義的な知にアクセスが困難な者にはけっして「社会的なる」問題として立ち現れることはなく、自己責任の論理に回収されることが明らかになった。

こうした目標・方法・成果を上げた本研究のさらなる進展を目指して、現在は2016年度から2020年度にかけて科研費(基盤研究C)の助成のもと、グローバル化に関する研究を行う展望を持っている。

これまでのグローバル化に関わる労働研究は、例えば世界システム論のそのように中枢・周辺国間でのブルーカラー労働の移動という視点で語られてきた。そのため、主として国境をテコとした金銭的な搾取やシャドーワーク化、労働受け入れに関する制度政策が研究対象とされ、または是正されるべきものとされてきた。

それに対して、近年ではグローバル化とICT化が新たな事態を引き起こすことが先駆的な形で示されている。例えばA・ネグリは、グローバル化とICT化によりホワイトカラー労働が標準化されることから人々はいつ・どこでも、それを行う能力を身につける態度が

要請されることを「生の情動労働化」と概念化している。また、がフリードマンは、グローバル化とICT化の進展が、ブルーカラー労働のみならず単純なホワイトカラー労働をも途上国にアウトソーシングする有り様を「世界のフラット化」と記述している。

こうした事態は、ブルーカラー労働の移動とは異なった形で労働の意味内容を再編成するとも考えられる。ブルーカラー労働のみならず、単純なホワイトカラー労働までもが周縁へと押し出される圧力が強まることによって、中枢内部にいる労働者たちが、そこから逃れるためにより複雑な対人関係や業務のマネジメント能力を持つことへと駆り立てられる。そして、それが叶わなかった場合には、グローバル化とICT化という社会構造へと問題を帰責するのではなく、自己帰責させられる。

本研究課題を受けた研究の中は、こうした事態を分析することを目指している。食い垂的には、グローバル化とICT化、そしてそれに伴う労働の移転をもたらす社会的な力学と、そこで労働者に課されるタスクを明らかにする。その中で、「グローバル人材」を誕生させる力学と、「グローバル人材」が遂行しなければならない自己の課題という経験的な課題と、フラット化・グローバル化と感情社会学・現代統治論といった理論的な課題との双方を分析することを展望している。

その具体的な内容としては、1990年代に日本社会の国際化が叫ばれて以降、2010年代のグローバル人材論に至るまでに、グローバル企業で活躍するための能力が語られたビジネス書や経済書、教育論について言説分析をまず行う。その内容は、特に社会的影響が多かった政策に関わる書籍や行政白書、特に進路就職にインパクトを与えるメディア媒体(新聞社発行の大学教育案内・就職ガイドなど)を考えている。

それらの中で、「グローバル人材」として求められ、語られていることが単なる語学やICTスキルに関わることから、次第に「教養」を通じた人間関係のマネジメント能力へと変化していることを示す。

そしてそれは、すべての世代・ジェンダーに共通して並行的に移動したわけではないだろう。単なる語学やITスキルを前提として片付け、企画と人間関係の構築を得られる層とそうでは無い層とに振り分け、世代・ジェンダー・階層の差を作り出していることを明らかにする

また同時に、グローバル化とICT化への対応の中での労務内容の変化や国内外への再配分について、ヤフージャパン、NTT、オリックス等の企業を通して一次的な資料を得る。その上で、上述したグローバル人材に求められる能力として、「人間力」・「企画・関係マネジメント能力」といった点に注目して、これらの企業で働く40代~50代の労働者10数名程度に対する調査を行う。

その際には、「人間力」・「企画・マネジメント能力」と労務内容の変化、さらにはそれに伴う自己実現、あるいは逆に地位降下への圧力を重点的に検討する。その中で、どのように「グローバル人材」となることが煽られているかを明らかにすることを構想している。

これらの言説分析、質的調査を踏まえた上で、社会学、社会経済学、社会哲学で展開されているグローバル化論を心理主義化と感情社会学の観点から、感情マネジメント能力による人とその生の再編という形で読み返すことを構想している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4 件)

崎山治男 2015 「書評 立岩真也著『自閉症連続体の時代』」『社会学評論』66-1, 150-152, 査読有

崎山治男 2013 「書評 鈴木和雄著『接客サービスの労働過程論』」『日本労働研究雑誌』55-6, 111-113, 査読有

崎山治男 2012 「社会と感情が交差する地点に向けて」『生存学』5, 206-216, 査読無
〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 2 件)

崎山治男 2014 「日本社会と社会問題」友枝敏雄編『社会理論と社会システム』中央法規出版 244 (211-225)

崎山治男 2012 「感情社会学」等、見田宗介編『現代社会学事典』弘文堂 1620 (224-227, 535)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
崎山治男 2013 「書評 北澤毅編『文化としての涙』」図書新聞 3/23 日付

6. 研究組織

(1) 研究代表者

崎山治男 (SAKIYAMA Haruo)
立命館大学・産業社会学部・准教授
研究者番号：20361553

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：